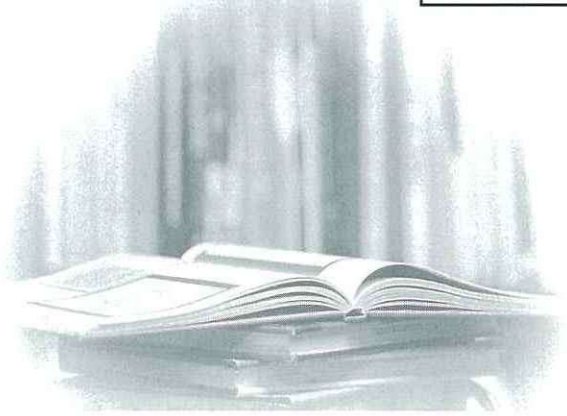

みに私は、ヒツジはバラを食べていないと思います。花に責任がある王子さまなので、どんなことがあっても花を守るでしょう。そして、王子さまならきっとヒツジを飼い慣らします。一人と一匹と一本で、毎日を楽しく過ごせると思います。

この本を何度読んでも、私が細かい内容を理解することはないでしょう。でも、この本は人にとってとても大切なことを訴えています。内容を理解できなくても感動してしまうから、この本を読み終えてもスッキリしなかったと思います。愛や気持ち、感情は目には見えません。でも、それらは表現することができるし、感じとることもできます。生きていく上で、心と心の会話が一番大切なのです。

いろんなことを学ばせてくれるこの本を読んで、自分の生き方について考えさせられました。私には、これから出会いと別れがたくさんあると思います。出会えたことに感謝して、いろんな人と接していきたいです。この本を読んで、たくさんの人に読んでもらいたいと思います。そして、自分の生き方について、考えてみてはどうでしょうか。

## ◆「よその子」を読んで

川根高校３年　片川博乃（かたかわひろの）

子どもたちは、万人に関係なく、不思議な力、魔力を携えて産まれてくるのだと思う。その魅力に当てられると、なかなか目を反らすことができなくなってしまう。それは、人間の持つ母性や父性といった本能が原因なのかもしれない。だが、それをとても不思議な力のように感じている。

ニュース番組を見て多く耳にするのは、虐待された子どもの事件や遺棄された乳児の事件だ。目に余る暴力行為が原因で、多くの子どもたちが命を落としている。子どもたちが傷つけられ、あまつさえ命を奪われてしまう。加害者は、いつでも大人だ。子どもたちは、何も悪くないのに人知れず傷つけられている。

子どもたちには、血の繋がりや国籍の関係なく愛らしさを感じる。無条件に無償の愛を与えたいと思う存在だ。そして、何よりも考えたいのは、子どもたちは弱いということだ。どうして、そんな子どもたちに対して、非情なふるまいをするのだろうか。どうして、そんなことができるのだろうか。この本を読んで、強く感じたことだ。殺人に至るまでの動機には、賛同できない。殺されても良い人間なんて、この世には誰一人としていないのだから。

これは、私が地域意識の強い町で育った故なのだろうが、「ＳＯＭＥＢＯＤＹ　ＥＬＳＥ，Ｓ　ＫＩＤＳ」つまり、この本のタイトルでもある「よその子」という言葉を聞くと、近所の子という意味に捉えがちだ。本来の意味よりも、比較的近しい存在だ。しかし、この本の中では、他人という意味で使われていた。

この世界には、よその子に対して深い愛情を持って接することができる大人が、はたして何人いるのだろうか。厭なニュースが飛び交っている今、私にはそんな大人が大勢いるとは信じ難い。

著者のトリイ・ヘイデンは、ちまたにいるような偽善者では無いと思う。本は日本語に訳されたものなのだが、トリイの文には親しみを感じた。彼女は、物語に登場するヒーローのように完璧な指導者だとは思うことができなかった。スーパーマンではなかったけれど、トリイの愛は子どもたちを救っていたのだと思う。

トリイのクラスには、あらゆるクラスからはみ出した四人の子どもが送られてきた。自閉症のブー。親から受けた虐待が原因で、読字障害のロリ。トマソは父と兄を継母に射殺され、憎しみの虜だ。無知な行動が原因で妊娠していて、うつ状態の続いているクローディア。

大きな障害を抱えた子どもたち、メインストリーミング